



しろいにじの家 (横須賀市)

## 医師が始めた集いの場

### ■地域に根差した医療

「しろいにじの家」は横須賀市鶴が丘にある交流スペースです。開設したのは、近所の三輪医院の<sup>ち</sup>千場 純院長。学生時代に僻地での医療に携わったことをきっかけに、狭い専門分野の医療ではなく自分一人で幅広い地域医療に対応できるようにしたいと考えるようになり、患者さんとその場だけでない関係性を築きたいとの思いが

から在宅医療を始めます。在宅医療には地域にネットワークを張り、患者さんが抱える心情や苦しみの課題にも耳を傾けて、医療以外の相談にも乗る「社会的処方」も不可欠です。そこで始めたのが「しろいにじの家」です。誰でも自由に訪れてランチやティータイムを楽しむカフェや、将棋や切り絵、折り紙などのサークル活動、「まち塾」という様々な分野の講師を招いて実施する講座に参加することが

できます。そうした日常のやりとりから、楽しみや悩みなどを語りつつつながり合うことができています。

順調に活動を続けていますが、2015年の開設当初は突然現れた交流スペースの趣旨や活動内容がわからず、近隣住民からの理解がなかなか得られませんでした。地域との関係に配慮しながら時間をかけて地道にコミュニケーションをとり、ようやく近隣住民の理解を得ること



ができたそうです。

### ■地域資源の見える化

千場院長は、しろいにじの家の活動にとどまらず、ここを拠点の一つとして地域で多様な担い手が連携することを旨とし、「鶴が丘人社プロジェクト」を立ち上げました。「人社」とは人が集う場所という意味とのこと。千場院長が中心となって医療、福祉、学校や地域団体などの「地域資源」を把握し、地図上で見られるようにする取り組みをしています。同じ地域の中でも、どこでどのような業種の人が仕事や活動をしているのかは意外と

### 一言アドバイス

地域資源は実は身近にたくさんあります。



しろいにじの家  
千場 純さん

### 成功のコツ

- ・ケアマネジャーや看護師がいることで安心して通える場に
- ・近隣住民とは地道にコミュニケーションをとって関係構築
- ・地域資源を把握し、見える化すること

わからないもの。地域資源を見える化することで、住民の方が困ったときにすぐに相談したり、助けを求められることができます。一人の医師が立ち上げた交流スペースを起点に、地域で支え合う仕組みが生まれつつあります。





関東学院大学生による空き家再生・活用事業（横須賀市）

## 横須賀の谷戸地域に響く若者の声

### ■自治会×市×大学による空き

#### 家再生・活用

リアス式海岸のように谷が入り組んでいる谷戸（やと）地域では、近年、郊外住宅地などの他地域と比べ、空き家や空き地が増加しているため、コミュニケーションの希薄化が進んでいます。こうした課題に引き合せてコミュニケーションの再生・活性化を図ろうと、自治会、横須賀市及び関東学院大学が協働で、空き家再生・活用事業に取り組んで

います。

きっかけは、2014年のこと。同大学で、地方の空き家活性化を学んでいた学生が「実際に取り組んでみたい」と教授に相談したことでした。大学のすぐ近くに谷戸地域があることから、空き家の再生・活用が始まりました。それから空き家の改修を積み重ね、地域のイベント参加など、地域に入り活動してきた中で、近所付き合いのよう新しい関係をつくることから始め

ようと、2019年7月にオープンしたのが「守谷ノ間」。追浜駅から徒歩8分ほどに位置する築80年の木造2階建ての空き家を、地元工務店の協力を得ながら改修。「住人」となった3名を含む法学部の学生たちが、様々な企画・運営を行っている

のです。

### ■大切なのは日々のつながりの

#### 積み重ね

「大切なのは練りに練られた企画ではなく、学生が地域の人



たちと接する中で日常に密着した交流を企画し実行することで す」。これは、学生を指導する同大学法学部地域創生学科准教授 木村 乃さんの、25年以上フィールドワークに携わってきた経験からの言葉です。「自分たちがやりたいだけの大きな企画を単発で実施しても、その後に人のつながりは生まれません。実際に地域に入りながら、自分たちで何をするのかを考えて欲しい。成功体験だけでなく、失敗体験も重要。その一つ一つが新しい学びになり、地域の人のちとのつながりになるの

### 一言アドバイス

人のつながりは地域に入ることで生まれる。



関東学院大学の学生のみなさん

### 成功のコツ

- ・何をするか、実際に地域に入って住民の方と接する中で考える
- ・学生のアイディアをまず実施してみる。うまくいかなければやめればよいという。試行錯誤の繰り返し

す」とのこと。

### ■おおらかな町内会長の存在

そして、そんな学生たちの取り組みを可能にしているのが、鷹取町内会の座間味 隆会長の存在です。学生が知らないうちに庭木が剪定されていたり、家具が増えたりしたりする。座間味会長や町内会の方々が「守谷の間」を自発的に“育てて”いるのです。座間味会長は「学生にも遠慮することなく一歩踏み出してもらって、ダメなら引いてもらえばそれでいいんです」とおおらかに見守っています。

地域の方に学生が教わる「麻

雀の会」は大盛況でした。学生は当初、将棋大会を企画していましたが、将棋を指す住民がほとんどおらず「麻雀」が大人気だということがわかり、「麻雀の会」を開催することになりました。「学生と接することで皆の気持ちがあらわさって、また、若者が住んでくれていることにぎやかになり、安全・安心の効果もあります」と座間味会長。大学生が実際に住み込むことで、自治会、市、大学が日常的に顔を合わせながらつながっていくという、「守谷ノ間」はそんな地域交流拠点です。



馬堀海岸遊歩道早朝ランニング（横須賀市）

## 走りたい人、この指とまれ！で新たなコミュ

## ニティ誕生

■海岸のプロムナードを走る老若男女

横須賀市にある馬堀海岸の遊歩道で箱根駅伝の走者だった大森 英一郎さんが「ランニング」を軸としたコミュニティづくりに取り組んでいます。2019年12月からスタートし、毎週土曜日の早朝に老若男女が自由なスタイルで5キロを踏破するといふもので、今では30名ほどのチームになっています。

地元の横須賀市内で観光関連

の仕事をした後に東京で起業した大森さん。いつかは地域に貢献したいという想いを持っていたところ、横須賀市から馬堀海岸のプロムナードを観光資源として使えないか相談があり、この取組みを始めたそうです。

■ランニングが生む多種多様な人たちのつながり

「この取組みは、年齢や運動能力を問わず誰もが気軽に無料で参加できます。走っても歩いても構いません。応援係やス

タート係のような形でも自由に参加できます」と話す大森さん。特徴的なのは参加者の多様性です。参加者は、大森さんも含め、お互いほとんど知らない人ばかり。新聞を見て走りに来た人もいれば、近所に住んでいる人、犬を連れてくる人、ランナーを励ますハイタッチをしに来る小学生など様々です。普段は触れ合うことがない、お互いに名前も職業もわからない人たちが一緒に参加し、気が付け

ばコミュニティがつけられていきます。ランニングが終わった後には、集合場所の湯浴施設で入浴を楽しんでいる人もいて、そこから新しいコミュニティも生まれてつづきます。

■「道」を舞台にした持続的な取組み

「インスタなどSNSで知らない人同士がつながる時代が来たことで、共通の趣味を軸にしたコミュニティが活性化しているように感じます」と大森さん。いつ来てもそこに存在する「道」

### 一言アドバイス

間口の広さと継続性を  
持たせることが重要。



馬堀海岸遊歩道早朝ランニング  
発起人 大森 英一郎さん

### 成功のコツ

- ・自由な参加形態により広がる人のつながり
- ・活動の後の交流もコミュニティを深める機会
- ・共通の趣味は人と人との距離を縮める

を舞台に、継続的に人のつながりを生み、育んでいくのがこの会です。

ランニングという共通の趣味により、これまで接することのなかった人たちのコミュニティが生まれている馬堀海岸遊歩道早朝ランニング。これからも新たな人のつながりが生まれていきます。

